地図でみる山形

市街地に刻まれた出羽の歴史

山田浩久 編著

目次

庄内地方	01 鶴岡市（旧鶴岡市）	都市計画による市街地の形成	4
	02 鶴岡市（旧藤島町）	穀倉地帯の中心地	6
	03 鶴岡市（旧羽黒町・旧櫛引町）	庄内文化の郷	8
	04 鶴岡市（旧温海町・旧朝日村）	県境の山岳地帯	10
	05 酒田市（旧酒田市）	最上川と庄内砂丘との共生	12
	06 酒田市（旧松山町）	庄内地方の第三の城下町	14
	07 酒田市（旧八幡町・旧平田町）	古代からの人の営み	16
	08 三川町	2つの都市に挟まれた孤高の町	18
	09 庄内町（旧余目町・旧立川町）	エネルギーの自給自足	20
	10 遊佐町	多彩な自然環境に根ざした生活	22
最上地方	11 新庄市	最上地方の中心地	24
	12 金山町	陸の孤島からの再生を目指す	26
	13 最上町	宮城県への連絡路	28
	14 真室川町	鮭延廻りの中心地	30
	15 舟形町・大蔵村	県内最小規模の町村	32
	16 鮭川村・戸沢村	古道の歴史を今に伝える	34
村山地方	17 山形市	中心地としての整備	36
	18 寒河江市	山形盆地の西の玄関口	38
	19 上山市	温泉街から温泉リゾートへ	40
	20 村山市	最上川を挟んだ都市計画	42
	21 天童市	街村から発達した都市	44
	22 東根市	都心移転による市街地の拡大	46
	23 尾花沢市	北村山の交通結節点	48
	24 山辺町	大都市近隣型都市としての発達	50
	25 中山町	都市と農村が混在する町	52
	26 河北町	紅花の里	54
	27 西川町	出羽三山の参詣路	56
	28 朝日町	渓谷に沿って成長した町	58
	29 大江町	複雑な地形を活用した町	60
	30 大石田町	北村山の交通結節点	62
置賜地方	31 米沢市	質実剛健な城下町	64
	32 長井市	川が創り出した歴史文化的景観	66
	33 南陽市	歴史の異なる2つの市街地	68
	34 高畠町	都市化中心不在の市街地の拡張	70
	35 川西町	二大都市の中間域	72
	36 小国町	盆地を流れる河川と暮らし	74
	37 白鷹町	舟運と鉄道の盛衰に対応してきた町	76
	38 飯豊町	散居集落が残るまち	78
索　引			80

まえがき

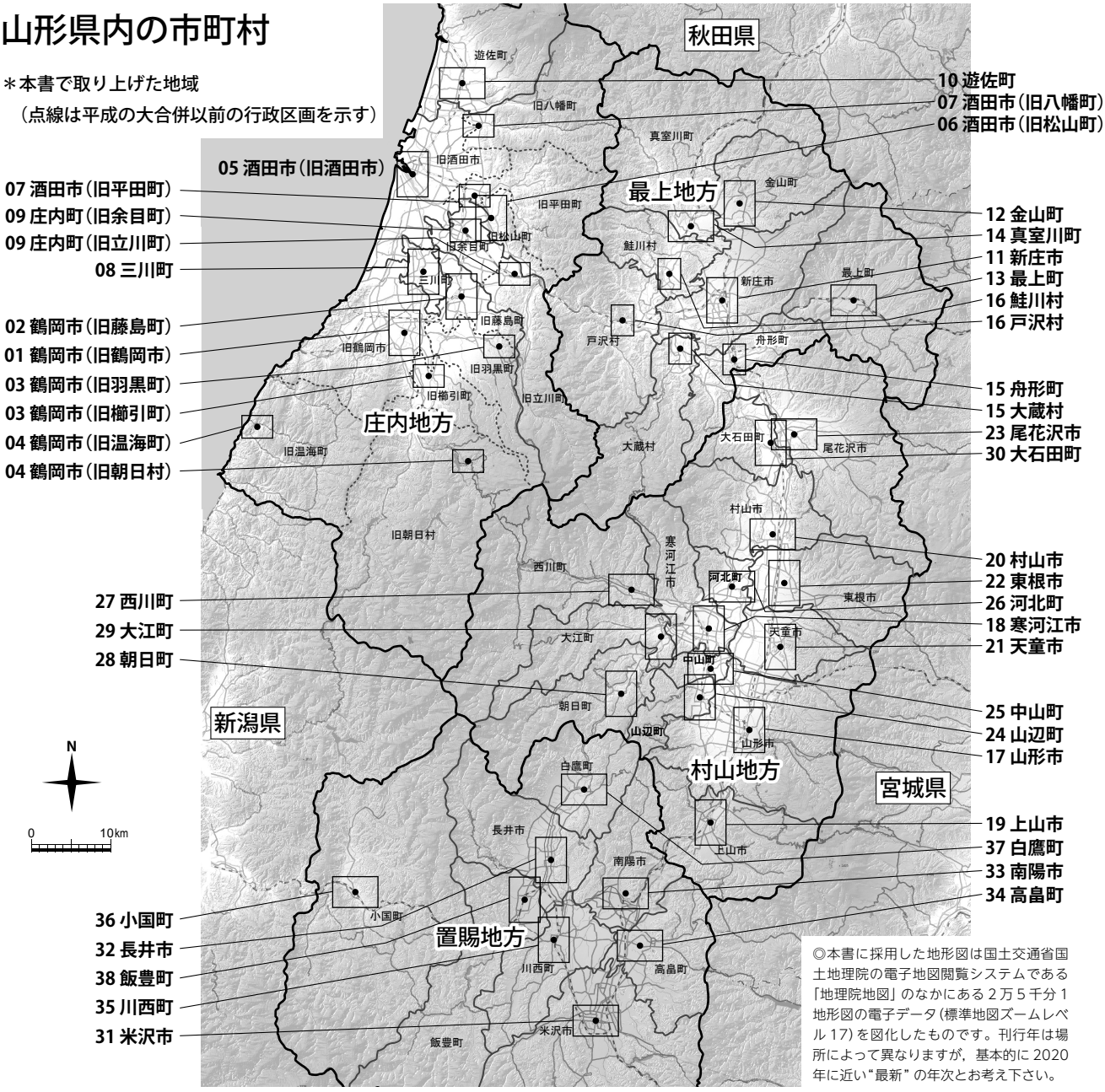
周知のように，日本の地図は国土地理院が発行する5万分の1地形図を基本にしている。同地形図は日本全土にわたり，正確に測量された地図をおよそ100年前にまで遡ることがきるため，近代に入ってからの土地利用の変化を確認し，地域間の比較を行うといった考察に適している。一方，2万5千分の1地形図は，大半の図葉が昭和期からの発行であるため，図歴を遡ることで得られる知見は5万分の1地形図を用いる考察に一歩譲るものの，更新頻度が高く，現在の状況に近い詳細な情報を得ることができる。また，同じ大きさの紙面上に描かれる実際の土地の面積が4分の1になるため，車での移動だと頻繁に地図を変えていかなければならないが，徒歩での移動であれば小道も確認できる手頃なサイズの散策用地図として活用することができる。

本書は，右頁に原寸の2万5千分の1地形図を置き，見開き2頁で山形県の市町村の市街地を紹介する構成になっている。B5版の本書1頁に収まる同地形図はおよそ6km×4kmの範囲となるが，場所によっては4km×3km×2枚の地図を収めた頁もある。

地形図は，その名称が示すように，平面に描かれた等高線を読み取り，地形を立体的に把握することを主目的としている。山形県は，自然豊かな地方県の一つであり，地形図に描かれた小地形を紹介することは興味深いが，本書では，住民がそうした豊かな自然と共生し形作ってきた市街

山形県内の市町村

＊本書で取り上げた地域
（点線は平成の大合併以前の行政区画を示す）



◎本書に採用した地形図は国土交通省国土地理院の電子地図閲覧システムである「地理院地図」のなかにある２万５千分１地形図の電子データ（標準地図ズームレベル 17）を図化したものです。刊行年は場所によって異なりますが，基本的に 2020 年に近い“最新”の年次とお考え下さい。

地に，そこに流れる歴史や培われていた文化が反映されていると考え，主に市街地に焦点をあてて各市町村を紹介することにした。なお，ここで言う「市街地」とは，DIDのような数値によって明確に定義されるものではなく，周囲に比して人口密度が高い人の集住地区を総称している。

山形県は，日本海に面する庄内地方，内陸北部の最上地方，同中部の村山地方，同南部の置賜地方に区分される。取り上げる市町村については，各地方に含まれる全市町村を網羅することを心がけた。当県の魅力は，あまり知られていない中小の市町村にあると考えたからである。また，当県では庄内地方でしか平成の大合併は行われなかったため，市街地の形成過程に関わる地域的なまとまりを考慮して，現在の 35 市町村ではなく，同大合併前の旧 44 市町村を対象にした。

市町村によっては，収録した地形図の範囲外に別の市街地が形成されていたり，山間部に当該市町村の特徴が局地的に観察される場合もある。文章も１頁というスペースに記載できる内容は極めて限定的である。しかしながら，本書は，山形県内の全ての市街地の情報を詳細に説明することを目的にしてはおらず，逆に文章量を減らして現地の状況を視覚的に示す写真を２枚ずつ挿入した。１頁目から熟読するというよりは，地方の実態を示すトピックを拾い出してもらいたい。本書をきっかけにして，自分の目で山形県を体感しようと思う読者が一人でも多く生まれることを切に願うばかりである。

2021（令和 3）年１月

山田　浩久（山形大学）

このプレビューでは表示されない頁があります。

01 鶴岡市（旧鶴岡市）～都市計画による市街地の形成～

図葉：2万5千分の1地形図「鶴岡」

城下町の成立

旧鶴岡市の市街地は，赤川の支流である内川と青龍寺川との間に築かれた平城（現鶴岡公園）を中心に発達した城下町である。鶴岡公園の近くに三角点があり，標高16.3mを示している。その東西の水準点がそれぞれ14.5m，15.6mを示していることから，少しでも高い場所を選んで城を建てたことが分かる。関ケ原の合戦後，最上義光に庄内の領土が与えられると，それまで大宝寺城と呼ばれていた平城を鶴ケ岡城と改名した。義光は，城下の水害を防ぐために，赤川（現内川）や青龍寺川の改修を行い，庄内平野の農業水利事業に大きく貢献した。

最上氏の後に庄内を支配した酒井氏は，新田開発に加えて，鶴岡城下町の整備も進めた。同氏は，城の近くに侍屋敷を置き（現在の家中新町など），その外側に商人町，さらに外側に寺院などを配置することで，同心円状の構造を持つ城下町を計画的に建設した。商人町は，現在の本町一丁目の街区に形成され，それを取り囲む寺社とともに，地図上で確認することができる。

また，天下泰平が長く続いて武士の風紀が乱れてくると，9代藩主・酒井忠徳は1805年（文化2），藩校（致道館）を設置して武士の教育に努めた。当初は，鶴岡駅に近い日吉町付近に校舎が建てられたが，1826年，10代藩主・酒井忠器が現在地に移築した。旧致道館は，東北地方で唯一現存する藩校建築である［写真1a］。

写真1a　庄内藩校「致道館」の講堂

近代以降の鶴岡の発展

1878年（明治11）に郡制が施行されると，鶴岡は西田川郡となり，鶴岡商工会議所会館付近（馬場町）に郡役所が設置された。建物は現在，国の重要文化財（1969年指定）として，家中新町の致道博物館に移築・保存されている。また，1919年（大正8）に鶴岡駅が開業し，1924年に羽越本線が全線開通すると，駅方向への宅地開発が活発化したが，線路を都市計画上の境界としたため，現在に至っても線路北側には田園地帯が広がる。ただし，高度経済成長期には工業化が進み，1973年（昭和48），同駅北に，用地面積45.1haの鶴岡中央工業団地が造成された。その後，隣接して東工業団地（図外），西工業団地が造成され，3つの団地の用地面積は約80haに及ぶ。

また，1972年から1983年にかけて新内川捷水路を開削し，市内を蛇行していた河道を付け替えることで，水害の軽減が図られた。さらに，1997年（平成9）には山形自動車道の鶴岡ICが供用を開始した。

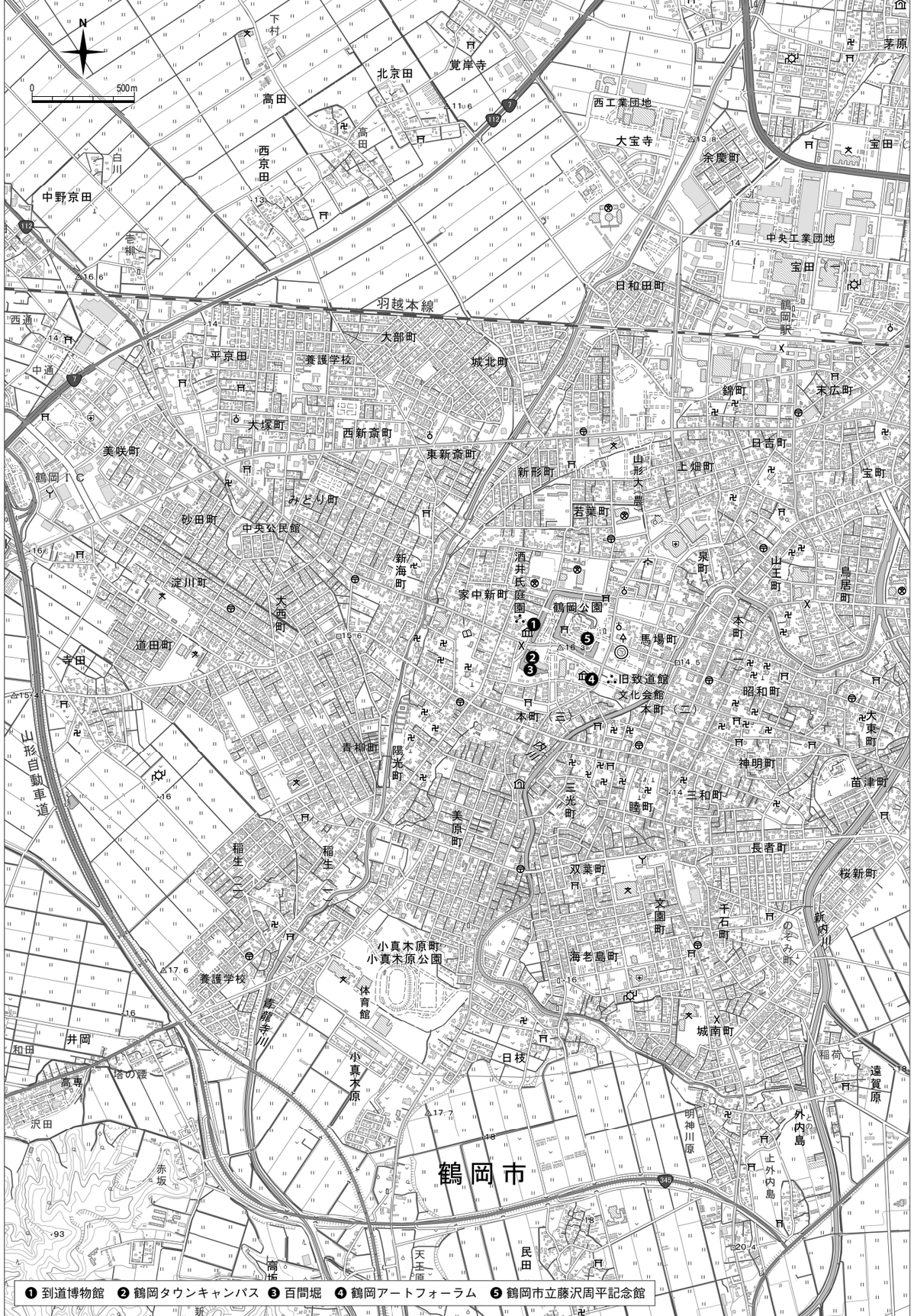
文教都市の整備

県道を挟んだ鶴岡公園の南側には，かつて市営野球場があったが，小真木原公園に新たな野球場が建設されたために解体された。そして，跡地を含む一帯に，2001年4月，慶應義塾大学先端生命科学研究所，致道ライブラリー（図書館），東北公益大学院大学院で構成される鶴岡タウンキャンパスがオープンした。建物周辺には，鶴ケ岡城のお堀跡である百間堀が再現され，教育関係者だけでなく，市民の憩いの空間となっている［写真1b］。

写真1b　鶴岡タウンキャンパスと再現された百間堀

また，旧中央児童館跡地には，2005年8月，芸術文化の総合展示施設である鶴岡アートフォーラムが完成した。さらに，2010年4月には，鶴岡公園内に鶴岡市立藤沢周平記念館が建設された。今後は，文教都市としてのさらなる発展が期待される。（山口）

［参考文献］田村俊和・石井英也・日野正輝編（2008）：日本の地誌4 東北．朝倉書店．鶴岡市史編纂会（2011）：図説　鶴岡のあゆみ．鶴岡市．



このプレビューでは表示されない頁があります。

11 新庄市 ～最上地方の中心地～

図葉：2万5千分の1地形図「新庄」・「舟形」

新庄盆地の平坦部を形成する広大な扇状地

新庄盆地とは奥羽山脈と出羽山地に挟まれた山形県北部の盆地を指し，同盆地を取り囲む1市4町3村の範囲は最上地方（最上郡）と呼ばれている。新庄盆地にはまとまった平野部が少なく，その大半は新庄市に含まれる。新庄市は同地方唯一の市部であり，位置的にも他の4町3村すべてに接している。

市街地は，泉田川を主要河川とする広大な扇状地の南部に形成されており，標高90～120mの扇央部から扇端部に展開している。ただし，現在の市街地を流れるのは升形川とその支流の指首野川であり，泉田川は出羽山地から張り出した丘陵部に谷を刻みながら西流し，鮭川村内で鮭川に合流する。

羽州街道を引き込んだ城下町の整備

中世において当市域を支配した清水氏は，現在の大蔵村比良に居を構え，農村集落を個々に支配していた在地土豪を統括する形で支配体制を確立した。1614年（慶長19），清水氏が最上義光によって滅ぼされ，当市域に配された日野将監は，こうした在地土豪の楯跡の一つに沼沢城（現最上公園）を築いた［写真11a］。同時期の文書に記された「新城」という地名には，将監の思いが込められていたとも言えるが，1622年の最上氏改易に伴い，将監も当地を離れてしまう。

その後，6万石の大名として最上地方に入部した戸沢政盛は，当初真室城（真室川町）を居城としたが，1625年（寛永2）には沼沢城に居を移し，城下町を整備した。城下町の縄張りは，同時期に山形に入った鳥居忠政によるもので，鳥越から北に向かっていた羽州街道が城下に引き込まれ，町人地が作られた。さらに，二代藩主正誠の時代（1650～1710年）には，現在の松本・下金沢町・上金沢町にあった侍町が三の丸郭内に移され，城下の羽州街道が東に引き直されて商人町，職人町の拡張整備が行われた（現鉄砲町，大町，本町）。その結果，城下は背後に升形川を置く城の東側に武家地と町人地が同心円状に展開する構造となった。

なお，市民の夏の大きな娯楽になっている「新庄まつり」は，五代藩主正諶が，1756年（宝暦6），大凶作で疲弊した領民と共に天満宮の例祭を行ったことが始まりと伝えられており，2016年（平成28）に「山・鉾・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。

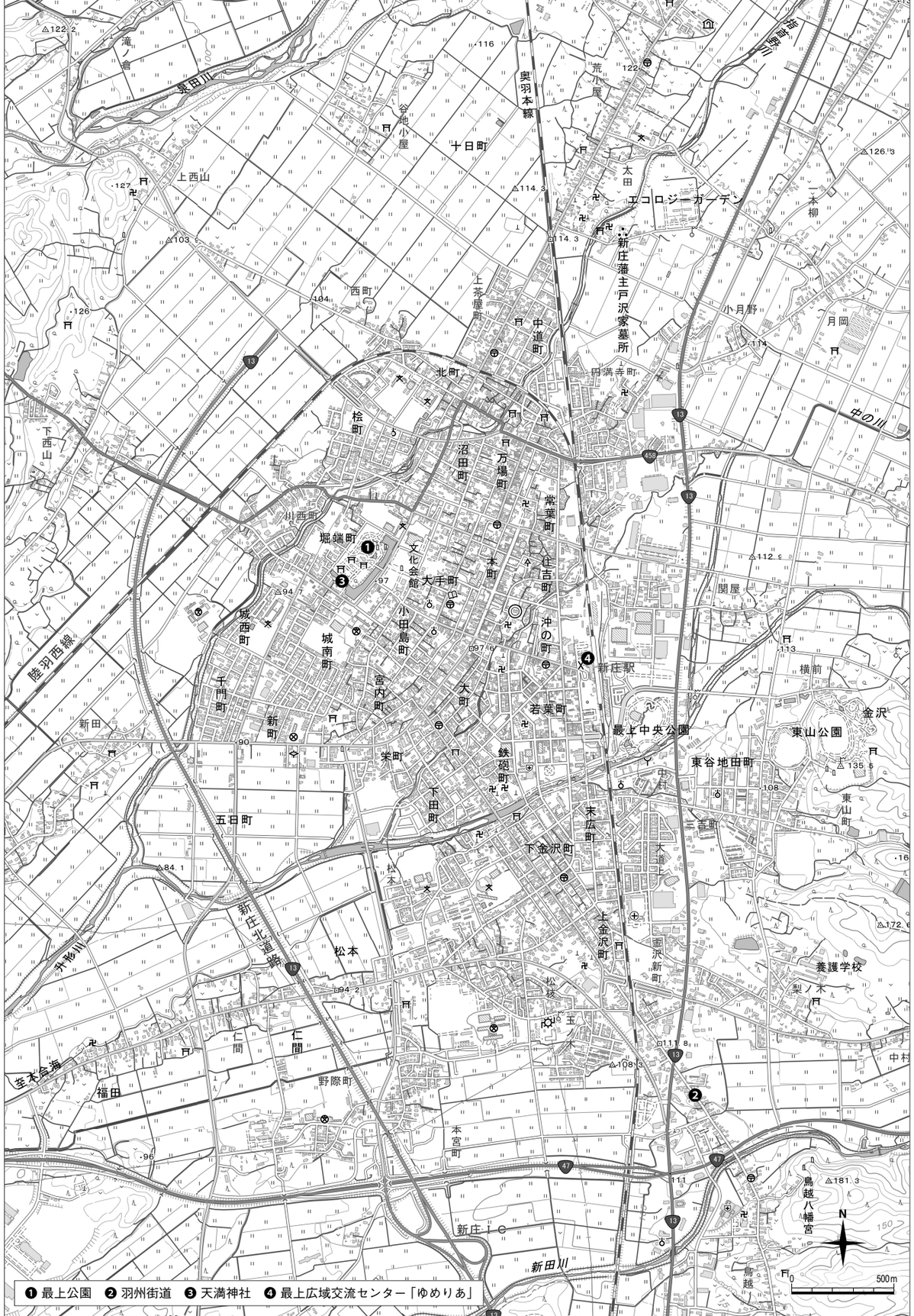
写真11a　最上公園

交通結節点としての発達

新庄藩は，領内に最上舟運の船継権が認められた清水河岸を抱え，同藩の外港として栄えたが，地形的な障害が大きく，城下との連結は改善されないまま幕末を迎えた。そのため，明治政府は，まず新庄城下から仁間，福田を抜けて本合海（清水河岸の枝河岸，図外）に至る新道を整備した。1903年（明治36）に奥羽南線（奥羽本線）が開通し，新庄駅が置かれると，同新道は鉄道輸送と最上川舟運との連結路となったが，1914年（大正3）に酒田線（陸羽西線）が敷かれると，最上川舟運の衰退は決定的なものとなった。戦後，その鉄道もモータリゼーションの進展に押され，徐々に地位を低下させていくことになるが，1999年に山形新幹線が新庄まで延伸されると，駅舎の改修と共に最上広域交流センター「ゆめりあ」が開設され，駅が人々の広域的な交流の中心として機能するようになった［写真11b］。（山田）

写真11b　新庄駅と併設されている最上広域交流センター「ゆめりあ」

［参考文献］小野正一（1998）：新庄城下町．仙台 東北・北海道の城下町．平凡社，104-106.



このプレビューでは表示されない頁があります。

17 山形市 ～中心地としての整備～

図葉：2万5千分の1地形図「山形北部」・「山形南部」

扇状地扇央部に発達した市街地

山形市の市街地は，馬見ヶ崎川によって形成された扇状地扇端部の湧泉帯に築かれた山形城とその東側に建設された城下町を空間的な基盤にしている。山形城は，1356年（正平11）に山形に入部した斯波兼頼によって築城されたが，城下町の建設・整備は，1590年代に（天正年間末期から慶長年間初期），最上義光によって進められた［写真17a］。山形城は，最上氏改易後に山形藩主になった鳥居忠政が流路を改変するまで，現在の肴町・錦町と北山形・宮町の境界あたりを西流していた馬見ヶ崎川と湧泉帯以西に広がっていた湿地を自然の要害としたため，中世の城でありながら平城の形態をとることができた。そして，義光が平城の利点を活かして，笹谷街道，羽州街道，寒河江街道（六十里越街道）を城下に引き込んだことが，その後の当地の経済発展に繋がった。

写真17a　山形城二の丸東大手門

構造上の特徴としては，三の丸大手門（「山形市立病院済生館」敷地内）から伸びる大手筋が十字路ではなく，丁字路によって町通りと連結することがあげられる（現在の地図では同地点は十字路になっているが，大手筋に繋がる道路は昭和期に入って建設された新道である）。義光が大手筋と町通りとの辻を作らなかったのは，笹谷街道を直線で城下に引きこみ，その沿線（小白川町付近）に下級家臣団を配して東方仙台藩への軍備を充実させるためと，寺町，町人町の街路を複雑にして笹谷街道からの侵攻を三ノ丸大手門で直接受ける危険性を回避する必要があったためと考えられる。

三島通庸の市街地開発

山形県の初代県令に就いた三島通庸は，藩主による統治が弱体化していく中で自らの資本と努力によって町人町を支えてきた商人たちの活気に着目し，県庁（現山形県郷土館「文翔館」）を，町通りを見渡せる場所に建設した［写真17b］。三島は，知事公舎（現生涯学習センター「遊学館」）前に通称「三島通り」と呼ばれる道路を引き，城下町時代の町割りをあえて踏襲しない独自の宅地開発を行った。同地区は，現在で言うところの文教地区に位置づけられ，三島通りの突き当たりには山形師範学校（現山形大学）が置かれた。同師範学校の本館であった建物は，現在，山形県立博物館教育資料館（山形北高等学校敷地内）として保全されている。

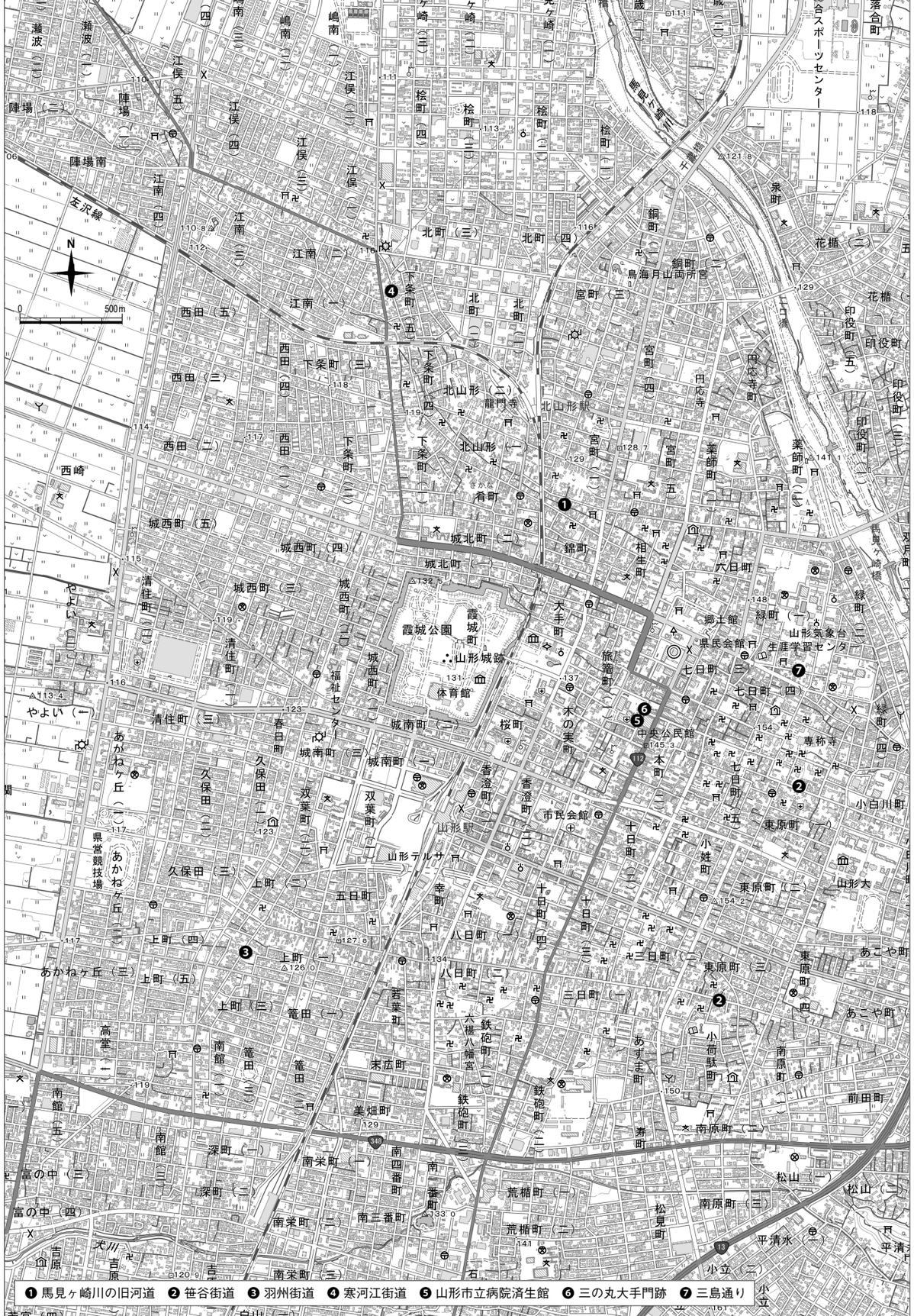
写真17b　文翔館（旧県庁）

城と町人町を分断する鉄道

1901年（明治34），奥羽南線（現奥羽本線）の福島駅–山形駅が開通した。また，1922年（大正11）には左沢線，1937年（昭和12）には仙山線（図外）がそれぞれ全通し，1992年（平成4）の山形新幹線の開通に至る。現在も山形市は県内鉄道運輸の主要結節点としての役割を担っているが，その基礎になった奥羽本線の敷設には，当市の歴史地理学的な特徴を見出すことができる。

明治に鉄道が敷設された城下町の多くは，城下外縁に線路が敷かれたが，当市では城と町人地とを分断するように線路が敷かれた。最上氏改易後，弱体化の道を辿った山形藩では城の荒廃が著しく，幕末には武家地の大半が簡素な農地や荒地になっていた。近代に入っても山形商人の行動が理不尽に制限された事例は数多く伝えられているが，県庁が置かれた場所からも明らかなように，都市構造上の中心は既に町人地に移行していた。城下町を分断する鉄道の敷設は，当市の歴史的発達過程を象徴する都市施設配置であったと言える。（山田）

［参考文献］ 伊豆田忠悦（1981）：山形市，「角川日本地名大辞典」編纂委員会編：角川日本地名大辞典　山形県．角川書店，847-869.



このプレビューでは表示されない頁があります。

31 米沢市 ～質実剛健な城下町～

図葉：2万5千分の1地形図「米沢北部」,「米沢」,「米沢東部」,「糠野目」

草木塔の文化を育んだ環境

米沢市は山形県の最南端に位置し，最上川の源流を有する。市街地は，奥羽山脈，吾妻連峰，朝日山地の山々が周囲を取り囲む米沢盆地南奥に形成されている。

米沢は置賜地方最大の城下町として人口や商業の集積が進んだ土地であり，燃料源であった薪の一大消費地でもあった。城下で使用する薪は，鬼面川から分水して城下に引き込まれた木場堰（帯刀堰）を使って現在の木場町に集められた。［写真31a］

全国に160～180基ほど存在するとされる「草木塔」は，その9割が山形県に分布し，特に置賜地方に集中している。1772年（安永元）に大火に見舞われた城下の再建などのために大量に伐採された材木の供養塔を伐採地の市内塩地平（図外）に建てたことが起源と言われているが，それが現代にまで引き継がれ，置賜地方の文化として定着したのは，米沢の発達を支えてきた自然環境への感謝と愛着によるためと思われる。

写真31a　木場町を流れる木場堰（帯刀堰）

厳密な都市計画によって管理された城下

市街地の空間的な基盤は，米沢城を中心とする城下町であるが，人口の集住は，712年（和銅5）に創建されたと伝えられる白子神社の周囲に発生した市町に始まるとされる［写真32b］。

米沢城は，1238年（暦仁元年）に長井時広（大江時広）によって築城され，その後，伊達氏，蒲生氏の統治時代を経た後，1598年（慶長3），上杉氏の会津移封によって同氏の管轄下に入る。米沢城が上杉氏の居城となるのは，1601年（慶長6）に上杉景勝が120万石から30万石に減封され，当地に移封されてからのことである。景勝は入城に際して家臣の召し放しをほとんど行わなかったため，城の整備を任された重臣の直江兼続は，従前の町人地を現在の大町地区にまで移し，武家地を拡充した。

米沢城の整備は，潤沢とは言えない財政状況の中で，過多な武士団の効率的な収容を目的に進められた。城下町絵図を見ると，城から放射状に引かれた直線によって城下が東西南北に色分けされているものが多い。西側に広がる下級武士団の居住範囲や東側に展開する町人地は，色分けされた枠内に収まっており，城下が計画的に整備されていたことが窺える。

写真31b　白子神社

鷹山の治世と近代化の遅れ

窮乏する米沢藩の中興の祖として名高い鷹山（米沢藩9代藩主，上杉治憲）は，自給自足型の経済を達成する産業として織物業に着眼し，藩主を問屋に見立てた藩内での問屋制家内工業を完成させ，財政問題を解消した。品質管理を行うことで「米沢織」というブランド名を得た織物の職人は城西地区に居住していた下級武士団であり，同地区は米沢織生産の中核となった。

しかし，近代に入ると，米沢織の生産体制は崩壊した。藩主という問屋の消失，職を失った旧中上級武士の参入，他地域からの職人や原材料の流入等がその要因である。また，半士半工として生産にあたっていた下級武士は，工場での勤務を嫌い，工場制手工業への移行も遅れた。

鷹山の治世は，生産流通体系の広域化や地域的分業といった工業の近代化に対応するものではなかったが，高付加価値製品を製造することが地理的に隔絶された米沢の発展に繋がるという思想は，織物業衰退後の当市における工業団地形成に受け継がれた。（山田）

［参考文献］ 米沢市史編さん委員会編（1991，1993）：米沢市史 第2巻 近世編1，第3巻近世編2．米沢市．

このプレビューでは表示されない頁があります。

索　引

【　】は地形図に示したその地域の「見どころ」である。

あ　行

赤川舟運 18
赤芝峡 74
赤湯温泉 68
赤湯地区 68
秋田街道 22
秋田街道，県道353号【23】
アクロスプラザ三川【19】
あさひ月山湖 10
朝日町 58
足湯「あんべ湯」【11】
足湯カフェ「チットモッシェ」【11】
飛鳥神社 16
温海温泉 10
あつみトンネル 10
左沢軽便線 52
左沢城 60
左沢 - 根合田断層 60
鐙屋 12
余目中学校【21】
余目背斜 20
鮎貝城 76
鮎貝城跡【77】
荒瀬川 16
荒砥城 76
荒砥城跡【77】
あら町通り 66,【67】
飯豊町 78
飯森山 12
イオンモール三川 18,【19】
生簀群【51】
砂子沢川【35】
イザベラ・バード 26, 68
イザベラ・バード記念コーナー【69】
石子沢川 52,【53】
石名坂油田 14
市ノ沢川【61】
五百川渓谷 58
磐根新道 34
岩部楯 28
岩部楯跡【29】
羽越豪雨 70，74
羽州街道【25】,【27】,【37】,【43】,【45】,【47】,【49】,【63】
上台峠【27】
越後街道（小国街道）74
烏帽子山公園 68
延喜式 22，34
奥羽山脈の分水界 28
王祇会館【9】
応住寺【29】
大石田河岸 48
大石田町 62
大江町 60
大型小売店【45】,【47】
大蔵村 32
大沢川【43】
大堰 54
大旦川水門【43】
大手門（松山城）14
大宮子易両神社 74
大森山 46
大谷地 70
大湯【69】
置賜公園（原田城跡）【73】
置賜総合支庁西置賜支庁【67】
小国川 28
小国城 74
小国城跡（旧小国小学校）【75】
小国新道【75】
小国盆地 74
小国町 74
若木山 46
おばこおけさライン 10,【11】
尾花沢駅跡【49】
尾花沢市 48
尾花沢小学校【49】
尾花沢鉄道 48
尾花沢鉄道線路跡【49】
尾花沢盆地 48
鬼面川 66
小山鉱山 56
おろし風 20

か　行

街村 22，44
街道の旧分岐点【49】
鏡沼 72
春日神社 8
霞堤 22,【23】
風のまち立川 20
河川事務所【35】
鶴脛の湯 40
月光川 22
月山ダム 10
月山道路【11】
加藤清正墓碑 8,【9】
角川の沢 34
金山川 26
金山盆地 26
金山城（楯山城）26
金山小学校【27】
金山町 26
河北町 54
がまの湯温泉【79】
上郷ダム 58
上山温泉 40
かみのやま温泉インター産業団地 40
上山市 40
上山城 40
上山城跡【41】
上山断層 40
上山盆地 40
亀ヶ崎城 12,【13】
河島街道【43】
川西ダリヤ園【73】
川西町 72
北羽前街道 32
北村山郡役所跡【43】
城輪柵 16
木場堰（帯刀堰）【65】
旧朝日村 10
旧温海町 10
旧余目町 20
旧五百川橋【59】
旧羽州街道【33】
旧遠藤家住宅【11】
旧鏡山部屋（柏戸）8
旧櫛引町 8
球形ガスホルダー【21】
旧立川町 20
旧致道館 4
旧長井小学校第一校舎【67】
旧西置賜郡役所「小桜館」【67】
旧羽黒町 8
旧東田川郡役所 6
旧東村山郡役所資料館 44
旧平田町 16
旧松山町 14
旧最上橋【61】
旧八幡町 16
京田 22
清川だし 20
玉川寺庭園 8
黒川能 8
黒川能伝承館【9】
黒滝【77】
郡役所 6
県道10号【79】
県道26号【39】
県道28号【49】
県道31号【33】
県道56号【33】
県道262号【29】
県道282号【39】
県立庄内農業高等学校【7】
小出舟場跡【67】
小鵜飼舟 52
光岳寺 74
高戸屋断層 72
小漆川城跡【61】
小漆川城 60
巨海院【61】
虚空蔵山 40
穀倉地帯 6
越王山 44
五重塔【9】
小松城 72
小松城跡【73】

さ　行

在郷町的集落 22
在郷町（尾花沢市）48
寒河江街道【37】
寒河江街道，県道277号【53】
寒河江川 38
寒河江市 38
寒河江城 38
寒河江小学校【39】
寒河江陣屋（柴橋陣屋）38
寒河江ダム 56
寒河江-山辺断層【39】, 52
酒田港 12
酒田三十六人衆 12
酒田市 12
酒田市美術館 12,【13】
酒田大火 12
さくらんぼ東根駅 46
鮭川 34
鮭川小学校【35】
鮭川村 34
鮭延城跡【31】
鮭延廻り 30
砂越跨線橋【17】
笹谷街道【37】
指首野川 24
猿羽根峠 32
産業会館【13】
散居集落 78
三山参詣 56
三山線線路跡【57】
三山線線路跡を部分的に活用した国道112号【57】
三山電気鉄道（山形交通三山線）56
三神合祭殿【9】
三の丸大手門【37】
JA庄内たがわ本所【7】
清水城 32
清水城跡【33】
清水廻り 34
重要文化的景観 66
宿場町 44
庄内経済連酒田倉庫遊佐支庫【23】
庄内砂丘 12，22
庄内シャーリング【7】
庄内総合支庁（庄内支庁）18
庄内町立川総合支所【21】
庄内平野東縁断層帯 14，22
庄内町 20
ショッピングセンター【41】
ショッピングセンター「エルパ」22,【23】
白子神社【65】
白鷹大崩壊 50
白鷹町 76
新内川捷水路 4
新産業創造館「クラッセ」【21】
新庄神室産業高等学校真室川校【31】
新庄市 24
新庄藩船番所跡【35】
新庄盆地 24
陣屋大手門跡【45】
スタンレー鶴岡製作所【7】
砂越城跡本丸公園 16,【17】
砂越油田 16
西部街道 62,【63】

このプレビューでは表示されない頁があります。

あとがき

地図を指でなぞりながら，その土地に行った気分に浸ることは地図好きであれば誰もが行う行為であろう。電子地図が普及し，全国の地図をスクロールして見ることができるようになっても，紙の地図を指でなぞる感覚は忘れたくないものである。

冒頭に記したように，本書は，山形県に関する完璧な知識を身につけるためにというよりは，書かれたトピックを現地で確かめてもらいたいという思いで企画した。是非，地図を指でなぞり，書き込みをしながら，本書を片手に山形県内を巡ってもらいたい。

実のところ，山形県内で訪れていない市町村はなく，当初は半年もあれば一人でも書ききることができると高を括っていた。ところが，いざ原稿を書き始めてみると，現地の特徴を簡略に示すことの難しさを痛感し，庄内地方については，より現地に明るい山口先生，松山先生に無理を言ってお願いすることになり，山口先生には置賜地方の飯豊町まで担当して頂いた。また，本学の本多先生にも同地方の長井市を中心に原稿作成の助け舟を出して頂いた。結果，山田が単独で執筆したのは，最上地方と村山地方となり，その全ての市町村に対して再調査を行った。教訓は，地誌は自分が理解することよりもそれを他人に理解してもらうことの方が遥かに難しいということである。

最後になったが，本書の出版を快く承諾して頂き，書籍としてまとめて頂いた海青社の宮内久社長に厚く感謝の意を申し上げたい。

2021（令和 3）年 1 月

山田　浩久（山形大学）

【著　者】

山田　浩久　やまだ　ひろひさ

1964 年兵庫県生まれ。東北大学大学院理学研究科単位取得退学後，博士（理学）取得。山形大学人文社会科学部地域公共政策コース教授。「人文地理学概論」，「地誌学」等を担当。

山口　泰史　やまぐち　やすふみ

1972 年岐阜県生まれ。東京大学大学院理学系研究科単位取得退学後，博士（学術）取得。熊本学園大学経済学部准教授。「経済地理学」，「地域経済論入門」等を担当。

松山　薫　まつやま　かおる

1969 年神奈川県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。博士（学術）。東北公益文科大学公益学部准教授。「人文地理学」，「日本地誌」等を担当。

本多　広樹　ほんだ　ひろき

1991 年群馬県生まれ。筑波大学大学院生命環境科学研究科修了。博士（理学）。山形大学人文社会科学部地域公共政策コース講師。「地域政策論」，「地域政策論演習」等を担当。

A Japanese Prefecture Revealed Through Maps – Yamagata's Towns as Reflections of their Region
edited by YAMADA Hirohisa

ちずでみるやまがた　しがいちにきざまれたでわのれきし

地図でみる山形 ― 市街地に刻まれた出羽の歴史

本書web

発 行 日 ――― 2021 年 3 月 15 日　初版第 1 刷
定　　価 ――― カバーに表示してあります。
編 著 者 ――― 山 田　浩 久
発 行 者 ――― 宮 内　　久

海 青 社
Kaiseisha Press
〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4
Tel. 077-577-2677 Fax. 077-577-2688
http://www.kaiseisha-press.ne.jp/
郵便振替　01090-1-17991

© H. Yamada, 2021.
ISBN978-4-86099-387-0 C0025 Printed in Japan.
乱丁落丁はお取り替えいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。